

認知症災害時支援モデル事業実践成果報告【あま市】

【モデル事業名】（グループホーム・地域住民との災害時連携体制構築事業）

1. 自治体情報（2023年1月31日現在）	
（1）人口	88,740人
（2）高齢者人口	23,097人
（3）高齢化率	26.0%
（4）面積	27.49km ²
（5）日常生活圏域	1圏域
（6）地域包括支援センター数	2か所

2. 事業の背景・目的
<p><背景></p> <p>○第8期あま市高齢者福祉計画・介護保険事業計画において「防災・防犯対策の推進と高齢者の安全確保」を掲げており、災害発生時に迅速に避難・救助ができる体制を整備する必要があった。</p> <p>○本市南部に位置する伊福地域は、海拔0m地帯であり、東西を二級河川に挟まれているうえ、県の「津波災害警戒区域」に指定されている。地域住民は、災害時への危機感を持っており、防災への取り組みを始めようとしていたところだが具体的な計画策定には至っていなかった。</p> <p>○また、当地域は高齢化率も市平均に比べて高く、要支援要介護認定者や在宅での認知症高齢者が多いため、平常時の支援だけでなく、災害その他非常時の事態においても安全が確保されるための支援が必要である。</p> <p>○これらのことから、伊福地域をモデルとして選定し、モデル事業所として「認知症対応型共同生活介護（高齢者グループホーム）ポプラ（定員18名）と小規模多機能型居宅介護の併設施設ふくじゅそう（定員29名）」（以下、2施設を「認知症GH」という。）並びにその所在地である伊福自主防災会をモデル地域団体として選定し、両者が主体となって、協働で認知症高齢者を支援する防災マニュアル作成に取り組むこととした。</p> <p><目的></p> <p>○認知症GHと伊福自主防災会の2本立てで災害時における防災マニュアルを作成し、災害時に協働で認知症高齢者等を支援する体制を構築する。</p> <p>○あわせて、認知症GHと地域住民との顔の見える関係づくりにより、日常生活上の地域の見守り力の向上や避難した際の避難所生活の一助につなげる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年目：①認知症GHにおける防災マニュアルの作成 ②自主防災会による地域の防災マニュアルの作成 ・2年目：認知症GHと伊福自主防災会による地域での合同避難訓練の実施、その避難訓

練を通して、それぞれの防災マニュアルの改良

3. 事業内容

<2021 年度>

〇4～5 月

- ・防災講演会（キックオフイベント）の実施
 - *「地域の災害弱者の命を守る対策の考え方」（講師：愛知県立大学 清水宣明教授）を認知症 GH の職員や伊福自主防災会を対象にそれぞれ実施。
- ・講演会後に防災と認知症に関するアンケートを実施。
（実施したアンケートについては、別添「参考資料」参照）

認知症 GH での防災講演会の様子▶



- ・伊福自主防災会での講演会終了後には、防災講師と役員での打合せを実施。



▲伊福自主防災会での防災講演会の様子



▲打合せの様子

〇5～9 月

- ・ドタバタストーリー*の作成

※ドタバタストーリーとは、災害時に起こりうる小さな出来事の集まりのこと。

*認知症 GH 職員が、被災したら何が起きるかをイメージしてドタバタストーリーを作成。

内容) ・パニックになった利用者がエスケープしてしまう。

- 安全な場所への移動を伝える言葉が伝わらない。
- トイレが使えないことで、失禁してしまう。
- エレベーターの使用ができず閉じ込められる。
- 車いすの昇降ができない。
- 骨折や流血をしているが、救助隊が来ない。
- 送迎中に移動ができなくなり、携帯電話もつながらない
- 夜間、居室から一斉にコールが鳴り、スタッフがパニックになる。 等

*伊福自主防災会が、被災したら何が起こるかをイメージして地震と水害のドタバタストーリーを作成。

- 内容)
- 懐中電灯が見当たらないため、何も見えない。
 - タンスが倒れて、出口を塞いでいて部屋から出られない。
 - 道路が冠水し、家から出られない。
 - 地震後の自分の家屋が大丈夫か判断できない。
 - ペットをどうしていいのかわからない。 等

○10～11月

- ドタバタまとりっくすの作成

*ドタバタストーリーで抽出した課題を小さなカードに記入し、縦軸を対象者及びもの、横軸を時間の経過（発災期、避難移動、落ち着き）とした表（ドタバタまとりっくす）に分類した。

*その後、課題に対し対策できるもの、できないものの分類をした（色違いのシールを貼って分類）。



伊福自主防災会が作成した
ドタバタまとりっくす▶

◀認知症 GH 職員が作成した
ドタバタまとりっくす

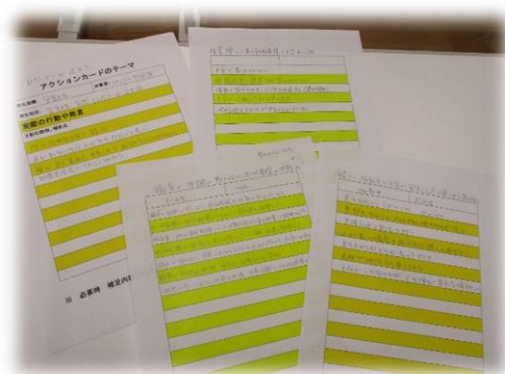


- アクションカード※の作成

※アクションカードとは、ドタバタまとりっくすで整理したイベントごとへの具体的な対応を記入したもの。

***アクションカードを集めたものがマニュアルとなる。**

アクションカード▶



<2022 年度>

〇5月～2月

- アクションカードの作成（2021 年度から継続）
 - * 認知症 GH、伊福自主防災会ともに、アクションカードの作成を進め、定期的に防災講師との打合せを実施し、アクションカード作成についての助言を受け、内容の追加・修正等を行った。
 - * 新型コロナウイルスの感染拡大により、グループワークでの作業が難しい時は、防災講師から防災グッズの紹介をしてもらい、事前の備えの参考としてもらった。
 - * 打合せ場所については、認知症 GH は施設内の会議室、伊福自主防災会は伊福地区集会所でそれぞれ実施した。



伊福自主防災会の打合せの様子▶

◀認知症 GH の打合せの様子





◀防災講師による防災グッズについての説明の様子

• 認知症サポーター養成講座の実施

- * 伊福自主防災会を対象に認知症サポーター養成講座を実施した。当初、地域の方を対象に実施する予定だったが、新型コロナウイルス感染予防の観点から、伊福自主防災会の中で主にアクションカードの作成に携わっている方に限定した。
- * アクションカードの作成において、地域に住む認知症の方への対応についても含めて検討してもらい、講座の内容を踏まえて進めていただくよう促した。
 - 実施日：9月17日（土）13時30分から15時00分
 - 実施場所：伊福地区集会所

認知症サポーター養成講座の様子▶



• 施設と地域での合同避難訓練の実施

- * 台風の接近により水害が予想されるという想定で、自宅での垂直避難ができず、市の避難所までの移動が難しい方を自宅から認知症 GH まで避難させるという内容で認知症 GH と伊福自主防災会による合同訓練を実施した。
 - 実施日：11月19日（土）9時30分～11時30分
- * 今回の訓練で避難が必要と想定するケースは以下のとおりで、伊福自主防災会の方が想定ケース①②の避難者役（以下、「避難者」という。）を演じることとした。
 - ①車椅子を使用している方
 - ②認知症の症状等で避難が困難な方

◀実施内容▶

【伊福自主防災会】

- 高齢者等避難があま市から発令されたとして、伊福区長が自主防災会の誘導担当者に避難者を認知症 GH に誘導するよう、SNS で指示。
- 指示を受けた担当者は、車椅子を使用している方 (①) と認知症の方 (②) の自宅へ、2グループに分かれて向かう。(1グループ3名)
- 担当者は、避難者とともに認知症 GH へ向かう。
- 認知症 GH に到着後、認知症 GH 職員の援助を受けて、避難者を認知症 GH の2階に避難させる。

【認知症 GH】

- 避難者に対して、受け入れ状況の確認、手続き等をする。
- 避難者のうち、誘導が必要な方を伊福自主防災会担当者と一緒に、認知症 GH の2階に誘導する。



◀車椅子を使用している方を想定し、誘導する様子 (①のケース)



認知症の方を想定し、誘導する様子 (②のケース) ▶

*避難訓練後、認知症 GH の会議室にて認知症 GH 職員と伊福自主防災会とで意見交換会を実施した。



◀意見交換会の様子

◀意見交換会の内容▶

【伊福自主防災会】

○車椅子を使用している方の支援を想定したグループ（①）の意見

- 道路がデコボコで体がふられた。
- 数か所、車椅子を強く押さないと前へ進めなかった。
- 車椅子を押す練習をしているが、引き続き練習が必要だと感じた。
- 車輪の扱い方をもう少し上手にしたい。
- 今回はスタンバイしていたためスムーズにいったが、災害時はそうではない。
- 認知症 GH の前の道路は、車の往来が多い。
- 地震だと住宅街の道は電線が多いので通ってくるのは難しい。
- 避難者が女性の場合、支援者に一人は女性がいた方がよいかもかもしれない。

○認知症の症状等で避難が困難な方の支援を想定したグループ（②）の意見

- 訓練ではしていないが、実際は家の中からの誘導になるので、避難者に靴を履かせるのも大変だと思う。
- 認知症への理解が必要。
- 認知症の方への対応方法が重要。
- 避難者の自宅へ自転車で来たが距離が遠いので時間がかかるため、近い人がよい。
- 顔見知りの人及び女性が支援者にいるとよい。
- 避難者をしてみて、男性 3 人が急に家に来て怖かったので、その場から逃げようとしたり、認知症 GH へ向かう途中も家に帰ろうとしたり、知らない建物（認知症 GH）にも入ろうとしなかったりするなど、認知症の人の行動を想像しながらやってみた。

○認知症 GH 職員の意見

- 声かけが大切であると感じ、「怖かったですよ。」「大変だったね。」などの労いの言葉をかけるようにした。
- 認知症の方は感知する能力はあるため、安心させることが重要。
- 今回問診ができず、本来は、けがをした人がいないかなどを確認する必要があった。
- どういう避難者がみえるか事前に連絡をいただくと受け入れる準備がしやすい。
- 1 がだめなら 2 で（災害時は何が起こるか分からないので、代替案を持っておいた方がよい）という風に考えておくとよい。

○その他

- 区長からの連絡は SNS でやりとりをしたが、添付資料の画素数が悪く見にくかった。

→書いたものだと時間がかかるため、実際はどうか検討が必要。

- 2 人は避難者に対応し、1 人は周囲の確認ができたため、3 人付き添いがいてよかった。

・誘導に一生懸命で、認知症 GH への連絡など移動中の連絡を取り忘れた。

・合同訓練を踏まえ、アクションカードの追加・修正

＊合同訓練後は、意見交換会で出た意見を踏まえ、それぞれアクションカード等を修正・追加しマニュアルとして完成させた。

・アンケートの実施

＊防災講師との打合せ最終日に、認知症 GH 職員及び伊福自主防災会の方に 2021 年 4 月に実施したアンケート（防災と認知症に関するアンケート）と同じものを実施し、防災意識の変化を確認した。

（実施したアンケートについては、別添「参考資料」参照）

4. 事業を進めていく上での工夫・配慮

<工夫>

○コロナ禍でも安心して活動できるように、感染症対策としてサーキュレーター、二酸化炭素測定器を用意した。

○地域での認知症の理解を促進するために、住民を対象とした認知症サポーター養成講座を実施した。

○避難のイメージの具体化と地域の中での協力体制を構築する第一歩として、認知症 GH と伊福自主防災会が合同で避難訓練をした。

<配慮>

○認知症 GH 及び伊福自主防災会の自主的な活動となるよう、行政は後方支援を意識し、グループワーク及び合同避難訓練時は見守り・調整役等に努めた。

○高齢者福祉の担当部署である高齢福祉課と防災の担当部署である安全安心課が連携しながら実施した。

5. 事業を通して見えてきた効果・課題

<効果>

○認知症 GH 及び伊福自主防災会

・アンケートにおいて、「市の災害情報メールに登録していますか」「自分が避難する避難場所を決めていますか」の問いにおいて、「登録している」「決めている」と回答した割合が伊福自主防災会の群で高くなっており、モデル事業を通して防災意識が向上した。

・また、「認知症について相談できる場所や窓口を知っていますか」「災害時に地域住民と何か協力できることはありますか」の問いにおいて、「知っている」「小さなことでもあると思う」と回答した割合が、認知症 GH 職員の群及び伊福自主防災会の方の群の両方で高くなっており、認知症への理解、災害時における施設と地域住民との助け合いの意識が向上した。

- ・合同での避難訓練を実施したことで、顔の見える関係が構築できた。また、その後の意見交換会で改善点及び課題を共有できたことで、連携への意識が向上した。

○行政

- ・これまであまり連携できていなかった市防災担当部署と連携したことで、部署間の協力体制が強化された。

<課題>

- 認知症 GH や伊福自主防災会において、今後もマニュアルの修正・追加や顔の見える関係性も継続していけるような工夫が必要である。
- 今回モデル事業を実施した伊福地域のような認知症 GH や自主防災会ばかりとも限らないので、他の地域で実践する際には、サポート方法などを検討する必要がある。
- 災害弱者は認知症の方ばかりではないため、防災担当部署と高齢福祉担当部署の他の部署とも連携して進めていかなければならない。

6. 今後の展望

- 今回のモデル事業で実践したプロセスを市内の介護事業所及び自主防災会等に拡充していく。
- そのためには、介護事業所及び自主防災会の防災への意識向上が必要不可欠であり、今回のモデル事業を紹介しながら、認知症の方の災害時における支援体制を事業所と地域とが連携しながら構築していけるよう、働きかけていく。